

末本文美士著
『他者・死者たちの近代—近代日本の思想・再考Ⅲ』

トランスビュー，2010年10月刊，377頁，3200円(+税)

名村 徹真

本書は、著者の近年(2001～2010)の論考をまとめた論文集であり、収録されている論文は以下の通りである。

序章 思想史の深層

I 国家と宗教

- 1 近代日本の国家と仏教
- 2 戦前における神道研究—宮地直一を中心に—

II 戦争と哲学／宗教

- 1 天皇主義と仏教
- 2 鈴木大拙の靈性論と戦争批判
- 3 戦時下京都学派と東洋／日本

III 死者と関わる

- 1 戦争の死者の慰霊と宗教
- 2 死者と向き合う仏教の可能性
- 3 死者と共に闘う—上原専禄—
- 4 死者から出発する哲学

IV 文学における他者

- 1 芥川龍之介の中国
- 2 川端康成とまなごしの美学
- 3 心霊世界と現実世界—宮沢賢治，二つの『銀河鉄道の夜』の間—

V 他者と周縁

- 1 女性の目覚めと禅—平塚らいてう—
- 2 偽史と東北—『東日流外三郡誌』
- 3 理解と誤解—異文化間における相互思想理解の可能性—
- 4 思想と思想史—中国・台湾の問題提起を承けて—

あとがき

初出一覧

目次からも明らかなように、本書における著者の関心は非常に多岐に亘っている。まずは著者の従来の研究対象である古代・中世における仏教思想と、本書で扱われる広範な問題群との関係性を理解するために、著者の近年における関心動向と本書の編集意図を概括したい。

本書は、トランスビュー『近代日本の思想・再考』シリーズの第三巻であり、第一巻『明治思想家論』、第二巻『近代日本と仏教』（共に 2004）の続編として位置付けられている。

『明治思想家論』の序章において著者自身が述べるところによれば、著者は古代・中世の仏教を見ていくにつれ、「仏教史」が近代固有の問題意識の上に成り立つものと認識するに至り、近代仏教へと関心を広げていった。一方、歴史的事実と同時に思想ないし思想史をも主要な研究対象としてきた著者としては、近代のそれである近代思想史が、丸山真男を筆頭とした政治思想史の業績に余りに強く引きずられてはいまいかという疑念を持ち、そうした政治思想史的近代像を相対化する視座としての仏教思想史を論じてきた⁽¹⁾。既刊二刊はそのような意図の下に構想され、明治の仏教思想家を取り上げ、仏教という観点から近代日本を捉え直す試みであった⁽²⁾。

本書はこうした試みに連なる位置を与えられているが、しかし既刊二刊より六年が経過し、本書は単に先述したシリーズ既刊の続編には留まらない。その間に著者の論考は更なる進展を見せしており、従って本書を位置付ける上では、本書がまた異なる重要な著作の上に成立していることを踏まえねばならない。

2007年に出版された『他者／死者／私—哲学と宗教のレッスン』（岩波書店）において、著者は自身の思索をまとめあげた。内容をごく簡略に紹介すると、著者は同書の中で「宗教＝哲学の実践」と定式化しており、その始点となるのが晩年の田辺元が説いた「死の哲学」である。著者は田辺の「死者との実存協同」と言う概念を、哲学において初めて「死」でなく「死者」を対象においたものとして高く評価する。そして「死者との関わり」こそが、近代的あるいは現代的な「個」と「個を越えるもの」の相克を打ち破り「他者」へと開かれていく起点となるとする。

そのように推移した著者の近年の思索を踏まえた上で改めて本書の位置を確認すると、序章において著者自ら述べているように、『他者／死者／私』を理論篇とするならば、本書はそれを実証し近代思想を仏教としての観点から捉え直していく歴史篇ということになる。特に死者に関する論考群などは、『他者／死者／私』を補う性格を顕著に持つ。

また著者によれば、本書を貫くのは近代思想の「深層」へと更に迫りゆこうとする態度であるという。対象を知識人に限ることなく、また政治動向への連続性に拘ることをしない、という姿勢であり、先述した政治思想中心の近代思想史を克服せんとする意図が見える。「深層」と称する仏教的思想伝統の近代的反映をいわゆる周縁から読み取ろうとしており、所収論文の対象が文学、女性、地方と広範に亘る由縁であろう。

では以下に、本書に収録されている論文から特に重要と思われるものを紹介していく。

I-1 「近代日本の国家と仏教」では、島地黙雷、清沢満之、高山樗牛、清沢門下、田中智学といった明治期の主要な仏教思想家を通して、各思想家それぞれの国家に対する思想と対応を取り上げており、これまでの著作の中で著者が論じてきた彼らに対する評価を整理したものとして読むことができる。その抄訳を更に大胆に簡略化して紹介すれば、その概要は以下の通りである。

島地により信教の自由が獲得されたが、「教育と宗教の衝突」論争によってキリスト教のみな

らず仏教も個の内面に限定された。この時期は日清・日露戦争間の 10 年間に相当し、欧化主義に対し日本主義が台頭する時期でもあり、論争以降、知識人達は個の内面の問題から宗教へと関心を深めていき、とりわけ文化的伝統を有する仏教の見直しが求められた。こうした宗教の内面化という傾向のひとつの達成として清沢が挙げられ、著者はさらにその点において高山、綱島梁川らを同列に置く。社会的問題関心から距離をおいた清沢らは「主観主義」とされ批判を受けたが、しかし著者によれば、彼らにより個人の内面における問題が深められ、後に夏目漱石や西田幾多郎へと結びついて行く。清沢門下である暁鳥敏は国家の主張を認め、また同じく清沢の門下である曾我量深は国家を越える方向性を示した。宗教(個)と国家(個を越えるもの)の対立という清沢においても既に顕在化していた問題が、より明瞭に表された形だが、かといって論争には至らず、議論が深められないままであったことがやがて戦争協力へと繋がっていったとする。田中智学は国柱会を結成し国体論と直接的な結び付きを強めたが、国家に対する従属でなく、むしろ宗教が優位にあるという思想に由来した点で特筆され、昭和期ファシズムの思想家、活動家へと影響を持ったという。更には、昭和期において信仰を貫いて獄死した牧口常三郎、仏教思想の反映は確認できないながら、社会主義に連なり大逆事件に関わった仏教者らを挙げている。

この論文は近代日本における国家と仏教の関わり方の諸相を描くものだが、著者がそれぞれの人物を後の思想動向と関連付けて論じている点に注目したい。牧口についても戦後の創価学会の動向に言及し、社会主義に連なった仏教者らの思想からも Engaged Buddhism に通じる社会性への関心を読み取っており、このことは取り上げられた全ての人物に及ぶ。こうした点に仏教思想史としての史的記述を行おうという筆者の意図が窺える。とりわけ著者の思想との関連からは、清沢、高山、綱島から漱石、西田へと至る系譜を見ている点が興味深い。漱石は『近代日本と仏教』において、近代日本の「個」と「個を越えるもの」の葛藤の代表例として挙げられ(pp.8-11)、また西田(及び京都学派)は他の著作においてもしばしば言及され、著者の思想において重要な位置を占める。個々の関連性が論じられていない点が惜しまれるが、そうした近代日本の思想に仏教の反映を見ていく観点は非常に興味深い。

Ⅱ-1 「天皇主義と仏教」では、陸軍軍人であった杉本五郎の遺著『大義』を取り上げる。当時百万部を売り上げたという同書において、杉本は天皇＝天照大御神を唯一の最高神とする天皇唯一神教を明快に説き、一木一草からキリスト、釈迦なども全て天皇の顕現であり、国家もまた天皇の所有であるとする。しかし天皇を信じない国家があり、そうした邪義を払うものとして戦争は位置付けられる。

このような徹底した天皇信仰に、杉本は仏教思想の影響を見出す。杉本は熱心に参禅していたが、それは「自己を無くする」ためであった。「個」と「個を越えるもの」の関係から言えば、杉本の論は「個」の完全な敗北となる。そのためには我執が断たれねばならないが、杉本はまさに自覚的に君臣一体を実現する修行として禅を捉えていた。

著者は杉本の論法を仏教における仏身論の転用と見る。天皇を人格神であると同時に汎神論的存在であるとみなす思考は、法身説と報身説の合一であるという。著者は近代日本が海外への伸張を図るにあたり、日本と言う特殊個別性を普遍的なものへと転化することが要請され、そこに仏教的論理の普遍性が用いられたと説く。また同時に著者は、仏身が終局的に「空」とされ存在

が曖昧となるに対し、天皇は具体的実在としてあり、その点で「個」の死も具体性を以て可能となったと指摘する。

なお著者は杉本に加え、仏教を背景に持つある学徒の遺した小説を取り上げており、出来る限り積極的に戦争に出ていくことを目指していた姿を読みとる。その思考から端的に仏教的反映が認められる訳ではないが、著者は青年はみな戦争に批判的であったという捉え方に注意を促し、また思想的背景を冷静に分析するべきと説く。

杉本のような思想の先駆に筧克彦が挙げられるが、杉本が特殊な存在でないという点で却って説得力は増している。また周縁を見ようとする本書において、個々の兵士に視線を向けることは重要であり、その際に徒に仏教思想の反映を指摘しない点も評価できる。しかしどれだけ認知され共有されていたか、という点では物足りない印象を受ける。父性、母性など話題は多岐及んでおり、他日整理された形での発表を待ちたい。

Ⅲ－１「戦争の死者の慰霊と宗教」では、戦後日本の戦没者慰霊を、各宗教という切り口から扱う。神道－靖国神社、キリスト教－長崎、無宗教－広島とし、それぞれ論じている。仏教については、戦争死者慰霊の象徴となるような施設を持たない点に言及した上で、東京都慰霊堂と興亜観音を紹介する。

まず神道－靖国神社に関しては、靖国神社を取り巻く複雑な状況を概観していく。映画『靖国』を挙げ、イデオロギーが単に表面的に設えられたものでなく、民衆の心情に根差したものであると論じるが、一方で民間の宗教施設であることにより「国家による戦没者の直接管理をぎりぎりのところで防いでいる面も無視できない」と指摘する。

仏教については、興亜観音では双方の死者を供養する「怨親平等」という理念が表れているが、一方で「怨親平等」思想は従来勝者・強者の側から用いられたスローガンであり、興亜観音が日中戦争中の戦勝記念としての側面を持つことから「怨親平等」が可能になった点に同思想の限界を見る。更に仏教が他宗教に比し大きな伝統的基盤を持つにも関わらず象徴的施設を持たない理由として、著者は仏教教団の積極的な戦争協力を行った点を再三指摘すると同時に、敗戦の中で「怨親平等」に代わる弱者・敗者の立場からの有力な思想的基盤を得られなかったことも一因ではないかと言う。

無宗教－広島の事例に関しては、靖国神社が右翼保守主義的な象徴であるのに対して、左翼進歩主義的な政治活動の象徴としての広島の姿を描く。具体的には、施設の公称としては「平和」が打ち出され、「慰霊」概念が排除されていることや、カトリックが独自に建造し重要文化財でもある世界平和聖堂がガイドブック等に記載されていないことを紹介する。このような広島の政治活動優先の在り方は、同じ被爆地であり、伝統に根付いたキリスト教が慰霊においても中心的な位置を担っている長崎の在り方との差異を鋭く浮かび上がらせる。このように、本章は戦没者慰霊に対する各宗教の対応という視点に立つことで、興味深い比較を行うことに成功している。

Ⅲ－２「死者と向き合う仏教の可能性」の前半部では、「千の風になって」の歌詞を切り口に現代における死者論を説く。「千の風になって」に表される「墓は無いが、死者と共にある」という死者観を、平田篤胤の幽冥論と比較する。篤胤は「死者は生者の世界の近くにおり、死者の

魂は墓に留まる」と考えたが、「千の風になって」表出している死生観は幽冥論的死生観を半分のみ継承したものであるとする。また篤胤の論を、本居宣長の描いた古代の死生観、源信の説いた浄土思想、仏教による葬儀の確立、寺檀制度による仏教の葬儀と墓地の独占、宣長の批判から幽冥論を説いた篤胤、と変遷を論じることで、現在の死生観をも古代からの延長上に位置付けた。後半部では、田辺元の「死者との実存協同」の概念を改めて論じている。

篤胤の幽冥論との類似は興味深いが、しかし近世以降、葬儀が仏教に独占され、ほぼそのまま近現代に至ることを思うと、死者を身近に捉える発想の根源を幽冥論に見出すにあたっては、幽冥論の死者観が広がり受容されていった足取りを把握せねばならないのではないだろうか。

Ⅲ-3「死者と共に闘う—上原専禄—」では、田辺、あるいは篤胤といった、死者を身近に捉え共にあろうと考えた人々に連なる存在として、歴史学者の上原専禄を取り上げる。まずは上原とその議論を概観しておこう。上原は1973年、妻の死を契機に『死者・生者』を発表した。田辺が「死の哲学」を唱えたのも、篤胤が『靈能真柱』を著したのも、共に妻の死を承けてのことであり、妙な符合がある。上原は、全共闘の時代背景の中で、医療過誤的側面のあった妻の死を日本の歴史的・社会的現実の一つとして捉えた。また上原は日蓮信仰者でもあり、妻の死という体験に関する考察は、日蓮の宗教・倫理意識の内実へ分け入ろうとする試みでもあった。そうした文脈の中に自らを位置付け、「死者」である妻と「生者」である上原が「共存・共生・共闘」しつつあると体感すること自体をまさに方法上の基点として、論を進める。その個別特殊な実感から上原は回向に生きることを決意するが、その中で「死者」と「生者」の「共存・共生・共闘」の上に成り立つ歴史、社会に思い至り、それらは普遍的な問題として捉えられるようになる。著者は、上原の「裁く死者」という概念を重視する。上原は近代を死者との共生を排除した時代と捉え、社会、世界は生者の占有でないとして近代批判を行っている⁹⁾。

同書は副題に「日蓮認識への発想と視点」とあり、日蓮解釈へと展開していく。著者は改めて検討を要す問題として、この論文の中では立ち入っていない。しかし著者が目指すのは田辺や上原が死者論において仏教に依拠したように、仏教をひとつの大きな基盤として新たな死者論を展開していくことのようなのである。その議論に際し著者が強調するのは、仏教の死者論はドグマ化した教理論の中に求めるべきでない、という点である。

なお、宗教、あるいは哲学を範囲確定された領域でなく、動的なものとして捉えようとするのは、『他者／死者／私』でも示される著者の基本的な立場である点を付記する。

Ⅲ-4「死者から出発する哲学」は医学系雑誌に寄稿された短い論文ではあるが、西洋的世界観と日本の宗教伝統に基づく世界観を図によって明示しており、著者の思想を端的に示す重要な論考であろう。キリスト教的世界観においては、生者は生者間での隣人愛的な関係を持ち、また同時に神との関係の中におかれる。ここでは生者と死者の関係を構築する場は無い。近代的世界観においては、この構図から神＝絶対者が除外され、生者の世界のみが自立する。

対比される日本宗教に基づく世界観は、死者供養を行い、死者、神、仏が「冥」に潜むが生者と関係性を有するものであって、了解不可能な他者性を前提とする。自身の内にすら捉えきれない他者の要素を認めながら、人と人が相互了解し「倫理」が現れる。そのような世界観として

描写している。

IV文学における他者、V他者と周縁と題された論文群については深く立ち入らないが、全て本稿でも紹介してきた近年の著者の関心の延長にあるものである。必ずしも仏教とは関わらず、「日本という場にあつて本当に自分の思想を構築すること」（本書 p.9）を志向する著者の思索に関連する題材が非常に幅広く扱われている。一例としてV-3「理解と誤解」を挙げると、中国の研究者と日本の研究者の間で日本の仏教思想に関して解釈・評価が異なる点について、同一の語句が異なる意味を持つことによって議論がおかしくなる様を例示する。更にそうした意味の差異を生じさせた歴史的、社会的背景を紐解いていき、他者理解における課題を説く。その中で、丸山真男が日本思想の「古層」に見た「なる」という概念を取り上げて丸山に対し批判的に考察を加えるなど、古代の仏教思想に通暁し、近代思想を経て日本思想全体を捉えようとする著者ならではの論考が多く収録される。

尤も、『他者／死者／私』以降の著者において「他者」という概念は重要な問題となるが、この萌芽は『近代日本・再考』シリーズの前二作のうちに見ることができる。『明治思想家論』の第十二章では西田幾多郎を取り上げ論じているが、西田が宗教を「哲学の終結」と呼んだことに触れ、また西田の思想において「他者」が希薄であることに言及している。『近代日本と仏教』においても、中国を中心としたアジアとの関わりを大きく取り上げ、「他者」に関する論考を複数収録している。どちらも、既に『他者／死者／私』への接続が意識された構成となっていたと言えよう。

このように見てくると、著者が抱いていた仏教史的、思想史的問題意識が、近代という問題群において共鳴し、新たな思索が形成されてきた過程を良く理解することができる。

ここにおいて改めて本書の序章「思想史の深層」に注目したい。本書を貫くのは近代思想の「深層」へと更に迫りゆくとする態度であるということだったが、著者は「深層」を「近代的、合理的発想では捉えきれないレベルの思想」と定義し、それが脈々と流れて近代日本の基盤となっているという。著者の構想はどこまで広がっていくのだろうか。ここまでに取り上げた著作では、著者は仏教的な思想・伝統の近代思想への反映を主題として扱ってきており、また本書あとがきによれば、著者が現在取り組んでいるのは「本書のような思想史的な考察を基盤として、それを哲学の体系にまとめ上げること」だそうだが、しかし近年でも『鎌倉仏教展開論』（トランスビュー、2008）が刊行されており、著者の古代・中世の仏教史それ自体に対する強い関心は依然として窺えよう。

もし著者が古代からの連綿とした「深層」の連なりを描写するとすれば、その際、本来の専門領域である古代・中世の仏教思想はどのように位置付けられ、どういった系譜として描き出されるのだろうか。更に古代・中世仏教の位置付けに関しては、顕密体制論以降、議論は活発に行われているが、未だ定型を見ない。著者がいずれ包括的な体系として思想史を記述するとすれば、「宗教＝哲学の実践」とする著者がその先で古代・中世の仏教それ自体の位置付けはどのようなのだろうか。私度僧の活動やいわゆる「鎌倉仏教」の扱いなどを含めて、興味の尽きないところである。

註

- (1) 『明治思想家論』 pp. 3-10
- (2) 『近代日本と仏教』では、「個」と「個を越えるもの」という分析概念が示され、著者は思想家の思索を見るにあたりその関係性に注目していく。「個を越えるもの」とは例えば昭和ファシズム期における国家や天皇をさすが、著者が特に同概念を用いるのは、明治から大正期、近代的「個」を要請された近代的知識人が、「個を越えるもの」＝国家と飛躍する前段階に、伝統的仏教がまさにその役割を担ったのではないかと考えているためであろう。
- (3) 「死者を排除して生活を処理しようとした瞬間、人間というものは死者に対してたちまち利己的・独善的な存在と化することを覚悟しなければなるまい。それだけではない。死者との絶縁において生きようとする人間は、最も根源的で最も物質的な地平における歴史的連関を否認することによって、己れ自身の存在を空洞化させ、己れ自身を浮遊生物化させる危険をおかすものであることを知らなければならない。』『上原専禄著作集』十六(評論社, 1988, p.43)